



バーバー・ウステンブラグさん
プロフィール

オランダ生まれ、アムステルダム在住。
コラージュフォト・アーティスト、きものスタイリスト。
日本のきもの文化に魅せられて20年以上。まだインターネットが無かった頃から苦労してきものを集め、本からの知識だけできものを美しく着こなすようになる。ヨーロッパのアンティークショップや日本からのインターネットショッピングで集めたきものや帯は500枚以上。オランダの布地を使って帯やきもの自作もする。きものしきたりにヨーロッパ的な解釈を取り入れたコーディネートは、伝統と斬新さがうまく合わさった独自のものとなっている。写真家としてきもの姿をモチーフにしたコラージュアートを制作するかわら、オランダの日本関連のイベントや制作の現場にきものスタイリストとして参加している。

バーバーのドリームアート [クリック](#)



バーバーさんのコラージュフォト作品「アムステルダム・セントラル駅にて」(左)、「kimono美女春2月」(右)

BERBER

たのは10代のころ。オランダで放映されていた「將軍SHOGUN」というテレビドラマを見て、登場人物たちが身にまとったきもの美しさに圧倒されたという。25歳の時、アンティークショップで初めて自分のきものを買った。

「最初に手に入れたのは黒留袖。その時は留袖という言葉も知りませんでした。黒地にピーコックの模様が華やかで一目惚れしました。銀色の袋帯も一緒に求めたのです。黒留袖はエレガントでブライデー。日常着として小紋も買いました。」

インターネットもない20年ほど前のこと。本を頼りに写真を見てイメージし、独学できものを着ることができるようになったというからアメージング！日本人顔負けだ。

「きものには格というものがあると知り、全部ほしいと思いました。きものには季節感というものがあると分かり、それらも全部揃えたいと思ったのです。」

日本に来る度にきもの市や骨董市、呉服店などをのぞき、これはというきものを買うこと20年。今では留袖、打掛、裾引き、訪問着、小紋、袖、銘仙など、きものと帯を合わせて500点ものコレクションを揃えるまでになった。

きものアーティストとして活躍

元々、大学でペインティング、フォトグラフ、彫刻などを教えていたバーバーさんが、2000年から「ドリーム・

アート」という作品を制作している。「さまざまな国、さまざまな時代のブライセスをテーマに、自分のアート、コラージュの中でおとぎ話を再現したいと思っています」

作品の中にしばしば登場するのがきもの。1月から12月をイメージした12の作品にはさまざまなきものコーディネートが登場して楽しい。

手作りの品を出品するウェブサイトで「ドリーム・アート」の販売もし、オランダで行われる日本文化関連のイベントやショーでのきものスタイリングと着付けも手がけている。

ショーや作品に使う振り出し物を見つけるのもとてもじょうず。

来日中、京都の東寺で開かれた市に朝五時起きで出かけ、きもの山の中から百円のきものを見つけたのだそう。

「今着ている『この縞のきものよ』と茶目つ気たつぷりに笑う。

バーバーさんの手にかかる、こんな素敵なコーディネートに。

これからの夢は？と尋ねると、「きものスタイリスト、アーティストとして日本のきもの文化の魅力を世界に紹介して、広めていきたい」という頼もしい答え。バーバーさんの心意気がうれしかった。(通訳として福山紫乃さんのご協力をいただきました)



華色の縞のきものにバラの花が描かれた帯、半袴は黒地に水玉という斬新な取り合わせでレクチャー会場に姿を見せたバーバー・ウステンブラグさん。長年きものを着慣れた人ならではのこなれ感が深い、かつこい。

通訳の仕事をするメンバーの前に、外国人の体型に合わせたきもの着付け方、肌の色や目の色を考えて似合うきもの色を探ることなど、実演を交えながら説明していく。

表情豊かで笑顔がチャーミングなバーバーさん。外国人モデルの体型をタオルで補正した後、きものゆかたをするすると着付けていった。帯を結ぶのも自由自在。袋帯、なごや帯とアレンジを変えて、軽やかに変身。こんなに着付けてって簡単だったかしら。バーバーさんはお太鼓結びや二重太鼓はもちろん、ふくらみや立て矢などの変わり結び、花嫁衣装の着付けもOKというスキルの持ち主だ。

独学で学んだきもの着付け

バーバーさんが最初にきものと出会っ

出逢えてよかった

きもの と わたし

Kimono to Watashi

第133回

コラージュフォト・アーティスト、
きものスタイリスト
バーバー・
ウステンブラグさん

きものと帯のコレクションは500点
オランダできものワールドを展開する
バーバーさんが追いかける夢とは